



時中堂だより

第5号（通算第15号） 平成28年9月13日（火） 発行：岩手県立花巻南高等学校 文責：遠藤

秋の始まりに ～「後期」になりました～

素晴らしい花南祭が終わり、学力強化週間を経て、前期末考査が終了しました。お疲れ様！後期が始まりました。自己を見つめ、次のステップに進む秋がやってきます。それぞれに目標を定めて、一步一步着実に前進していきましょう。

3年生は受験本番が近づいてきました。試合終了まで絶対に諦めない戦いを続ければ、終了数秒前でも逆転勝利できる…リオ五輪も教えてくれましたね。自分の可能性を信じて、夢に向かって突き進んでください。頑張れ、3年生！

ピンクシャツ・デー ～行動する人々は美しい！～

2月の最終水曜日をピンクシャツ・デーというのだそうです。私は最近知ったのですが、ちょっといい話なので、紹介したいと思います。

事件は、2007年カナダ東部ノバ・スコシア州のハイスクールで起こりました。ある日、ピンクのポロシャツを着て登校した9年生（注1）の男子生徒が、周囲から「ゲイ」だとからかわれ、暴力を振るわれたのです。

これを知った12年生（注2）2人はディスカウント・ショップでピンク色のシャツを50枚買い込み、メールやSNSで「明日、校内でピンクシャツを着てほしい」とクラスメイトに呼びかけました。皆がピンクのシャツを着ていれば、彼をいじめる理由はなくなるという考えでした。

翌日、驚くべきことが起こりました。2人が登校すると、校内は既にピンクのシャツを着た生徒達で溢れていたのです。この呼びかけは、瞬間間に多くの生徒達に拡散され、共感を呼んでいたのです。いじめに加わった生徒達は、自分たちの愚かさに気づいたことでしょう。後日、男子生徒は堂々とピンクシャツを着て登校し、いじめはなくなりました。

この出来事は地元メディアが大きく取り上げ、翌2008年にはブリティッシュコロンビア州知事により「ピンクシャツ・デー」と命名されて、いじめに対して反対の意思を示し、決して傍観者にならずに行動する大切さを伝える運動として、カナダ全土に広がったのだそうです。バンクーバー市では、子供達やプロスポーツ選手を始め多くの人々が参加する大イベントで（写真）、現在ではアメリカ、スペイン、日本など世界70カ国以上に広がっています。

傍観者にならず、他者のために行動する人間は美しい。1人の力は小さくとも、善意が繋がれば大きな力になるのですね。マイナス面も指摘されるSNSですが、2人の正義感を全校生徒につなぎ、大人を含む多くの人々を動かすのに役立ちました。美しいエピソードです。

（注1）9年生：日本の中学3年生にあたる

（注2）12年生：日本の高校3年生にあたる



上のイラスト：
ピンクシャツデー実行委HPより

左の写真：
BC州観光局HPより

つながる力、つながらない力 ～安心と束縛の間で～

前ページでは、SNS が美しい行動につながったエピソードをご紹介しました。

しかし、これは SNS そのものの素晴らしさを証明するものではありません。素晴らしかったのは、2人の高校生と彼らの呼びかけに応えた人々の行動です。

SNS は伝達の道具に過ぎません。仮に SNS にハマって勉強せずに成績を下げたら、悪いのは自分の弱さです。仮に SNS の中で誰かを傷つけてしまったら、自分の過ちを認めて謝罪しなければなりません。〇か×かは、SNS 自体ではなく人間の行動で決まるのです。

ネット、メール、SNS のない社会に戻ることはないかもしれませんが。だからこそ、SNS の中には、良い風も悪い風も吹いていることを知っておいてください。SNS との距離を決めるのは自分自身です。風の中をしっかりと歩けるかどうかは君次第なのです。吹かれるままに、ウロウロと右往左往してはいけません。



鉄腕アトム

生徒諸君は「アトムの黒電話」を見たことがありますか？ 『鉄腕アトム』は、2003年生まれの人型ロボットであるアトムが主人公です。モノレール、動く歩道、知能と感情を備えた人型ロボット…敗戦の数年後、日本が本当に貧しかった1951年にこの作品が発表されたことを考えると、天才・手塚治虫の想像力に驚きます。彼が想像した未来社会は、実際の2003年とほぼ同じか、むしろもっと進んでいました。ただ一つ、情報通信技術だけは、現実社会の発展が彼の想像を超えたのですね。作品中で、アトムは長いコードのついた黒電話を使っていました。これは、情報通信技術が想像を超えた速度で進展し、場合によっては人間がついていけない状況にもなりかねないことを示すものとして、しばしば語られる話です。

話は変わりますが、都会で暮らしていた学生の頃、待ち合わせは大変でした。スマホも携帯もない時代、「今、どの辺？」と聞くことはできません。大人数で待ち合わせると、誰かが場所を勘違いして来なかったなどということも普通にありました。日本が経済的に豊かだったと言われる1980年代ですが、4畳半一間のアパートにはお風呂も電話もパソコンもなく、5人の女子学生が1箇所のトイレを使い、緊急連絡先は大家さんの電話番号という生活でした。

大学1年の時、急に体調を崩して3週間入院し、その後もしばらく欠席しました。誰にも連絡しませんでした。退院の2日後、友達が尋ねてきました。「何度来ても、いなかった。心配してたよ」「ありがとう。もう大丈夫だから」「ノート、とってあるよ」

1人で入院し、1人で戦い、1人で過ごした時間の分だけ、彼女の心遣いが嬉しかった。ずっとつながってはいないからこそ、友情が身にしみたのです。1人の時間は孤独ですが、恐れる必要はありません。孤独は人を成長させます。若い時代の孤独は、成長の糧です。

ネット、メール、SNS…つながることで支えられ、安心して過ごせる場面は数多くあります。「つながる力」は現代を生きる力の要素でしょう。

一方で、つながりが束縛となり、自由や成長を妨げる場合もあります。何かの不都合でつながらない状況も起こります。私達現代人には、「時につながらない選択をしたり、つながらない状況を生き抜いたりする力」＝「つながらない力」が、むしろ重要かもしれません。つながらない孤独な時間は学び考える契機となり、成長の糧となるに違いないと思います。

